

現代の小中学生の携帯電話利用

～親子の意識・実態調査、学校調査から～

研究開発部 宮木 由貴子

目次

1. 研究の背景と目的	22
2. 携帯電話サービスの多様化とニーズの変容	23
3. 子どもと携帯電話	23
4. アンケート調査結果	24
5. 小中学校の現状と課題	38
6. まとめ	39
7. おわりに	40

要旨

急速に普及が進んだ携帯電話(PHSを含む、以下同じ)は、今日、小中学生でも利用が見られるようになった。少子化・核家族化等で家族構成員が少なく、塾通いや習い事に行く割合も高い現代の子どもにおいて、携帯電話は親との連絡手段として注目を集めている。

子どもが携帯電話を利用することで、親が子どもの居所や安否確認をでき、子どもも気軽に親に連絡ができるようになるなど、親子間の安心感が高まる。その一方で、利用料の問題や子どものうそ、不透明な友人関係、非行との関連など、親が新たに抱える不安も多い。

実態を探るべく、親子に対するアンケート調査を行った結果、現代の子どもたちの4割強が何らかの形で携帯電話を利用していることがわかった。子どもたちは通話機能だけでなく、文字メッセージ交換や着信メロディにも関心があり、その傾向は特に女子で顕著である。また子どもたちにとって、携帯電話は緊急用というだけでなく、「自分専用機」としてのニーズも高い。

母親の携帯電話の利用は6割弱で、母親の利用があると子どもも利用しているケースが多かった。親が子どもに携帯電話を持たせるか否かを判断するには、ライフスタイルからみたニーズや料金的な問題だけでなく、親子の信頼関係や想定される悪影響などもポイントとなっている。

一方、小中学校に対する調査から、子どもの携帯電話の所持により、授業中の利用や紛失・盗難、イジメやケンカなどの問題が生じていることが明らかになった。所持禁止の学校が多いものの、条件付きで認めている学校もあり、学校によって扱いは様々である。

子どもにおける今後一層の携帯電話の普及を見越し、今後、携帯電話を挟んだ親子関係やコミュニケーションのあり方、ルールやモラルについて検討すべきである。子どもにおける携帯電話利用のよしあしが問われているが、子の携帯電話の所持を「プラスに作用させる」ような親子関係や使い方を模索していく必要がある。

キーワード：携帯電話、親子関係、安心

1. 研究の背景と目的

(1) 研究の背景

1990年代後半ごろから、携帯電話(携帯電話・PHSを含めて扱う、以下同じ)は急速に普及が進んだ。年間に1千万件近いペースで加入が増え続け、2000年末には携帯電話・PHSを合わせて6380万台を超えている。国民の2人に1人以上が携帯電話を持っている現在の日本において、子どもたちは幼いころから携帯電話を身近にして育っている。そればかりか、高校生や20代の若者を中心に進んできた携帯電話の普及は、今日、さらに低年齢層の小中学生においても進んでいる。実際に自分専用として使用することは少なくとも、家族や友人の携帯電話に触れるなど、小中学生が携帯電話に何らかの形で接触する機会は多い。

20代～30代に飽和状態になりつつある携帯電話について、通信事業者や各種端末メーカーの目も積極的に子どもや高齢者に向けられるようになっており、数年前から、子どもを対象としたサービスや端末も提供されている。さらに、料金体系が多様化する中で、「プリペイド式の携帯電話」が出現したことにより、「使わなくても基本料を払う」という従来型の携帯電話の保有・維持形態に加え、純粹に使った分だけ課金されるという料金体系があらわれた。こうしたことにより、子どもが携帯電話を利用できる環境は、着実に整備されてきたといえる。

一方、子どものライフスタイルについては、核家族化の進行や共働き世帯の増加により親が働きに出ていて日中家にだれもいない、きょうだいが少ないなどいくつかの傾向

が指摘されている。さらに、今日の子どもは塾通いや習い事などで夜間外出することが多い。総務庁の調査^{*1}によれば(2000)、小学生で74.7%、中学生で65.2%が何らかの習い事に通っている。通う日数は週に2～3日が平均的だが、4日、5日という多忙な者もいる。習い事は主に放課後に行われることから、現代の子どもにおいては、夕方から夜間にかけての屋外行動・単独行動が多いといった行動パターンが予想される。

一方、社会的な側面についてみると、子どもが絡んだ無差別犯罪や凶悪犯罪が目立っており、被害者のみならず加害者までが小中学生であるなど、犯罪の低年齢化も問題となっている。実際、中村(1996)^{*2}が小学校に対して行った調査によれば、小学校の高学年になるまでに男子・女子ともに4割前後の子どもたちが、何らかの犯罪の危険に遭遇するという。

こうした状況が、子どもの自衛対策として、また親が子どもの安否確認や居場所確認をする際のツールとしての、携帯電話の利用ニーズの背景となっている。

(2) 研究の目的

子どもが携帯電話を保有することについては、子どもの安否確認・居場所確認や緊急時の連絡など、子どもの生活上の安全面や利便性における様々なメリットがあげられる。しかしその一方で、子どもの利用ならではの問題点も指摘されている。例えば、使いすぎなどの料金的な問題、居場所等についての虚言、覚醒剤や不純行為などの犯罪や非行との関連などである。実際、組織的な犯罪や不法に行われる薬物取引、援助交際などでは、携帯電話が多用されてい

る。子どもが携帯電話を使うようになれば、犯罪の低年齢化が進行する中で、こうした問題に接近する危険性も必然的に高まるとの懸念が生じる。携帯電話は、子どもの行動における安全確保の一助となる一方で、子どもの世界を負の側面でも広げてしまうリスクを内包しているのだ。

今日の子どもたちは「電話」に対して、明らかに親世代とは異なる感覚を持っている。また、子どもの親世代においても、従来型の「電話モラル」のようなものが崩壊しつつあり、電話に対する意識や感覚、使い方が個人によって異なっている^{*3}(宮木1998等)。

こうした中で、各家庭の親子が携帯電話に対してどのような意識を抱き、どういう価値観に基づいて携帯電話の利用の可否などの決定を行っているのだろうか。また、そこにはどのような問題点があるのだろうか。本調査研究においては、これらについて現状を明らかにし、今後さらに小中学生^{*4}に進むであろう携帯電話の普及を見越し、今後の問題点を指摘することを研究の目的としている。

2. 携帯電話サービスの多様化とニーズの変容

近年の携帯電話は、通話機能に加えて、文字メッセージ交換の機能が付帯しているものが一般的となってきた。また、コンピュータと接続しなくても、端末だけでインターネットに接続できる携帯電話^{*5}も急速に普及している。その他、ゲームや電子ペンを内蔵したり、利用者サイドでの着信メモ

ディ(着メロ)^{*6}のアレンジも可能になるなど、通話以外の機能が充実し、使われ方も多様になっている。

携帯電話の使い方としても、加入電話をまったく持たずに携帯電話を家の電話として利用するケースや、家族共用とは別に自分専用の回線として携帯電話を確保するケース、パソコンの代わりにインターネットへの接続が可能な携帯電話を購入するというケースも多い。また、プリペイド式の携帯電話が出現したことで、気軽に2台目の携帯電話を保有したり、通常はほとんど使う機会のない人も、無駄なコストなく「とりあえず持つ」ということができるようになった。

このように、携帯電話は、単に移動中・外出中の電話としてではなく、個人の通信環境に合わせられる幅の広い通信機器に変貌してきた。利用者のニーズも、「いつでもどこでも」という従来型の携帯電話のコンセプトから脱却し、個人は各々のライフスタイルから生じるニーズに合わせてサービスや端末を選べるようになってきたのである。

3. 子どもと携帯電話

こうした動きの中で、携帯電話は友人ネットワークを維持・構築する上での必携ツールとして、若者の間にめざましい勢いで普及した。今日、携帯電話は、価格の低下に伴い、さらに利用者の低年齢化が進み、小学生や中学生への普及が進行している。既に携帯電話を使っている子どもたちの用途をみると、「夜道の護身用」「親からの居場所確認」「親による子どもの管理」「塾な

どからのカエルコール」「友人との連絡用」「緊急時の連絡(子から親へ/親から子へ)」などといったケースが多い。

子どもに携帯電話を持たせるきっかけとしては、子どもが欲しがると親が子どもに持たせたがるケースがある。しかしいずれにせよ、収入のない小中学生は、携帯電話の保有や利用に伴って発生する費用について、必然的に親等に依存せざるを得ない。すなわち、携帯電話の保有にあたっては、親の同意と援助を要する。また、携帯電話の保有によってもたらされる「安心」についても、「子自身の安心」ニーズと、子が携帯電話を持つことによってもたらされる「親の安心」ニーズがある。

こうした点を踏まえると、子どもの携帯電話利用については、親と子の両者から意見を収集することで実態を明らかにする必要がある。そこで、本研究では、小学生と中学生を対象に、親子に対してアンケート調査を行った。

4. アンケート調査結果

(1) 調査概要

調査の概要は図表のとおりである(図表1)。調査対象とは、ライフデザイン研究所の全国のモニターから、家族協力による10~14歳の子ども(小学校5・6年生・中学生に該当)497人とその親、さらに8~9歳の子ども(小学校3・4年生に該当)を持つ親^{*7}140人、計1134人(子:497人、親:637人)を抽出した。このうち10~14歳の子どもと親についてはペアとなっている。

(2) 子どもの携帯電話の利用状況

まず、子どもに対して、「あなたはケータイ(携帯電話)を使うことがありますか」との設問で利用状況を尋ねたところ、全体の42.7%が使うと答えた(図表2)。この回答は、「自分のケータイを持っている」「家族のケータイをかりて使うことがある」「友達のケータイをかりて使うことがある」の合計である。これによると、携帯電話の利用は、男子より女子で、小学生より中学生で多いことがわかった。ただし、自分専用の携帯電話を持っている子どもはまだ少なく、「家族の携帯電話をかりる」という利用方法が主流である。自分専用の携帯電話を持っているのは、全体で9.8%となっているが、男子が6.6%であるのに対して、女子は13.1%と男子より多かった。

(3) 「自分専用」の携帯電話の入手方法

続いて、自分専用の携帯電話を持っている子どもに対して、どのようなきっかけで携帯電話を保有するようになったのかを尋ねた(図表3)。最も多かったのは、「自分が欲しかったので、お父さんかお母さんに持たせてくれるようにたのんだ」という、子ども自身が積極的に欲しがったケースで、6割を超えていた。

一方、「自分は別に持たなくてもよかったが、お父さんかお母さんに持つように言われた」という、いわゆる親が持たせるケースは2割強だった。このほか、ケースとしては「お父さん、お母さん以外の人にもらった(プレゼント、おさがりなど)」「自分で買った」というものがあるが、これらはあまり多くない。

専用機を持つとした子どもがあまり多くないため厳密な比較はできないが、全体的

に小学生の保有者が「親に持たされた」ことによるものであるのに対して、中学生では「自分から欲しかった」というケースが多いようだ。また、男女別にみても、女子の方が「自分から欲しかった」ケースが多い。

(4) 子どものライフスタイルと携帯電話利用

それでは、どのようなライフスタイルの子どもで、携帯電話の利用が多いのだろうか。

通学時の交通手段別に利用の有無をみたところ、電車やバスを使って通学する子どもにおいて利用が多かった(図表4)。学校の公私別でみると、私立校において利用が多い。

また、習い事の有無についてみると、「主に学校の補習や受験対策としての学習塾」「ピアノや歌、絵画など、芸術系の習い事」に通う子どもにおいて、携帯電話の利用が

図表1 調査の概要

調査概要	調査地域	全国	
	調査対象	A:10~14歳の子どもの母親 B:8~9歳の子どもの母親	
調査概要	サンプル数	637(A:497組、B:140人)	
	サンプル抽出方法	ライフデザイン研究所生活調査モニターとその家族協力	
調査概要	調査方法	質問紙郵送調査法	
	実施時期	2000年9月	
調査概要	回収数	618(A:482組、B:136人)	
	回収率	97.0%	
調査概要	有効回答数	614(A:480組、B:134人)	
	有効回答率	96.4%	
回答者属性	年齢構成	<親>	20代 0.8%
			30代 36.7%
			40代 55.6%
			50代 4.0%
			60代 2.6%
			無回答 0.3%
	<子>	A	10歳 13.3%
			11歳 16.7%
			12歳 22.9%
			13歳 21.0%
<子>	B	14歳 22.7%	
		15歳 0.4%	
		無回答 2.9%	
		8歳 44.0%	
性別	<子>	A	9歳 56.0%
			無回答 -
			男子 42.1%
	<子>	A	女子 56.3%
			無回答 1.7%
			男子 44.0%
職業	<親>	B	女子 56.0%
			無回答 -
			専業主婦 44.5%
			会社員・公務員・団体職員 10.8%
			自営・自由業(家族従業員を含む) 3.4%
	パート・アルバイト従事者 37.3%		
	その他 1.6%		
	無回答 2.4%		

多い(携帯電話の利用ありの割合:「学習塾に通っている」46.7%・「通っていない」40.8%、「芸術系の習い事に通っている」47.4%・「通っていない」41.5%、図表省略)。

(5)子どものタイプと携帯電話利用

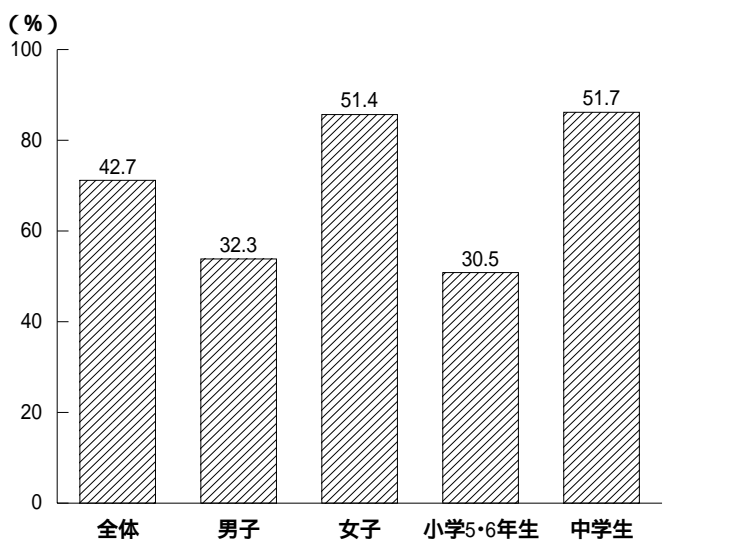
さらに、子どもの人付き合いのタイプ別に携帯電話の利用の有無をみた。全体的に、人間関係に積極的な子どもたちにおいては、そうでない子どもたちに比べて携帯電話の利用が多い(図表5)。携帯電話の利用者と非利用者において、「新しい友だちは、なるべくたくさん作りたい」「自分のなかよしグループがある」「だれとでもすぐに

なかよくなれる」「友だちとケンカをすることがある」といった項目についての回答を比較すると、いずれの項目においても、携帯電話の利用者の回答が非利用者の回答を上回っていた。

(6)子どもの自分専用の携帯電話ニーズ

一方、自分専用の携帯電話を持たない子どもが、どの程度自分専用の携帯電話を欲しがっているかについてみたところ、6割が携帯電話を欲しいと考えていることがわかった(図表6)。利用実態と同様に、男子より女子で、小学生より中学生でよりニーズが高い。特に女子では7割以上がニーズを

図表2 子どもの携帯電話の利用状況(子の回答)



	(%)				
	全体	男子	女子	小学生	中学生
n=	480	199	265	165	266
自分のケータイを持っている	9.8	6.6	13.1	3.0	15.7
家族のケータイをかりて使うことがある	29.8	23.2	34.4	26.2	31.8
友だちのケータイをかりて使うことがある	3.1	2.5	3.9	1.2	4.2
ケータイはまったく使わない	55.6	67.7	48.6	69.5	48.3
無回答	1.7	-	-	-	-

注:子どもの回答:「自分のケータイを持っている」「家族のケータイをかりて使うことがある」「友だちのケータイをかりて使うことがある」の合計)
全体以外は無回答を除いて集計

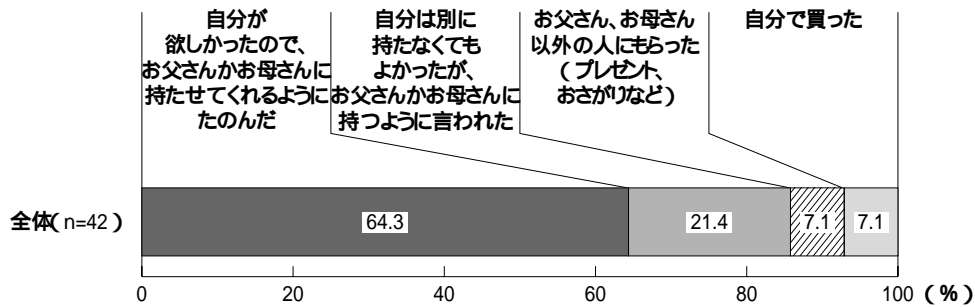
訴えている。「ケータイはいらないと思う」と答えたのは、全体で14.9%だが、男子で21.0%と多いのに対して、女子では10.1%に過ぎなかった。きょうだいの有無別にみ

ると、兄や姉がいる子どもでは、いない子どもよりもニーズが高かった(図表7)。

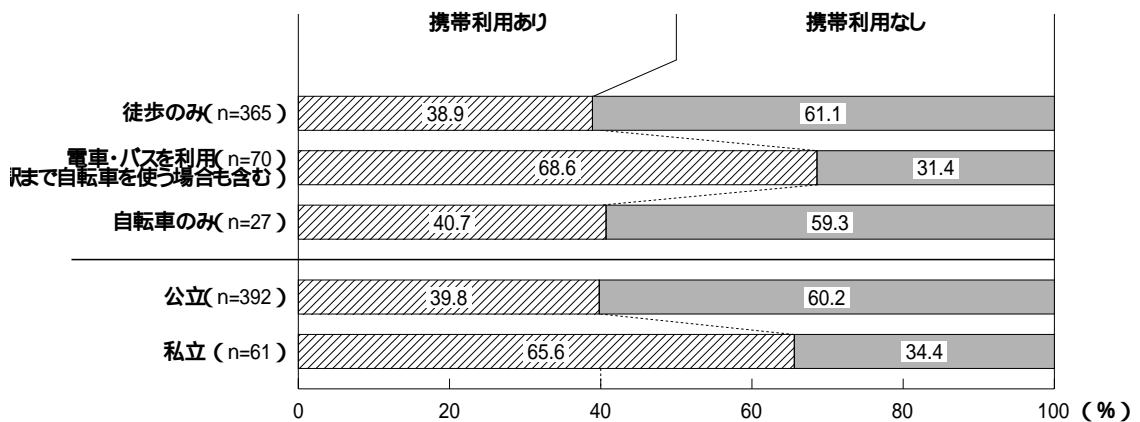
(7)子どもが携帯電話を欲しい理由

それでは、子どもはなぜ携帯電話を欲し

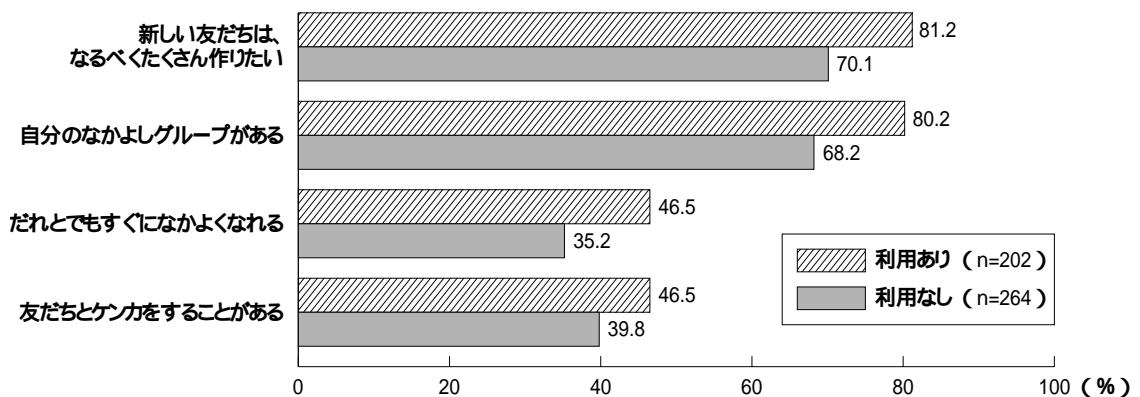
図表3 携帯電話の入手のきっかけ(子の回答)



図表4 交通手段・学校別携帯電話の利用状況



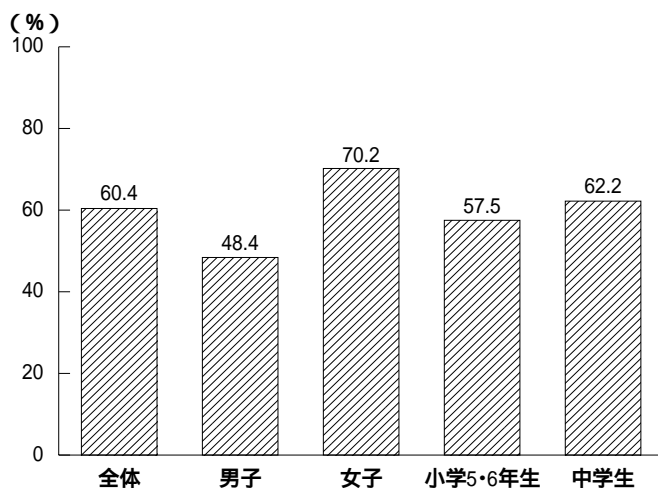
図表5 子どもが携帯電話の利用の有無別にみた子どもの友人関係(肯定した割合)



いと感じるのだろうか。これについて、携帯電話へのニーズを訴えた子どもに尋ねた(図表8)。1位は「いつでも電話をかけられると便利だから」で41.5%だった。以下、

「自分だけの専用の電話がほしいから」が31.0%で続いており、「いざというときに助けを呼べるから」(24.0%)という「移動性」の評価を超えていることがわかる。子ども

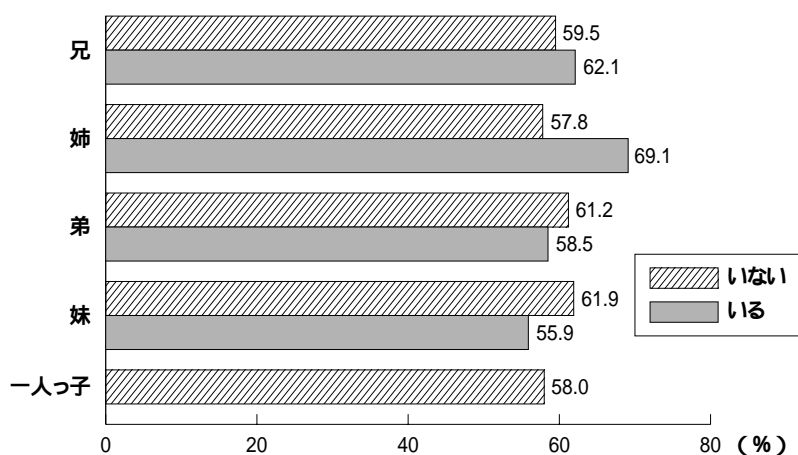
図表6 子どもの携帯電話ニーズ(子の回答)



	(%)				
	全体	男子	女子	小学生	中学生
n=	429	186	228	160	222
自分だけのケータイを、いつもほしいと思っている	24.0	16.7	29.4	20.0	26.6
自分だけのケータイを、ときどきほしいと思う	36.4	31.7	40.8	37.5	35.6
自分だけのケータイは、あってもなくてもどちらでもいいと思う	24.7	30.6	19.7	26.3	22.1
自分だけのケータイはいらないと思う	14.9	21.0	10.1	16.3	15.8

注:「自分だけのケータイを、いつもほしいと思っている」、「自分だけのケータイを、ときどきほしいと思う」の合計

図表7 子どもの携帯電話ニーズ(きょうだいの有無別)



注:「自分だけのケータイを、いつもほしいと思っている」、「自分だけのケータイを、ときどきほしいと思う」の合計

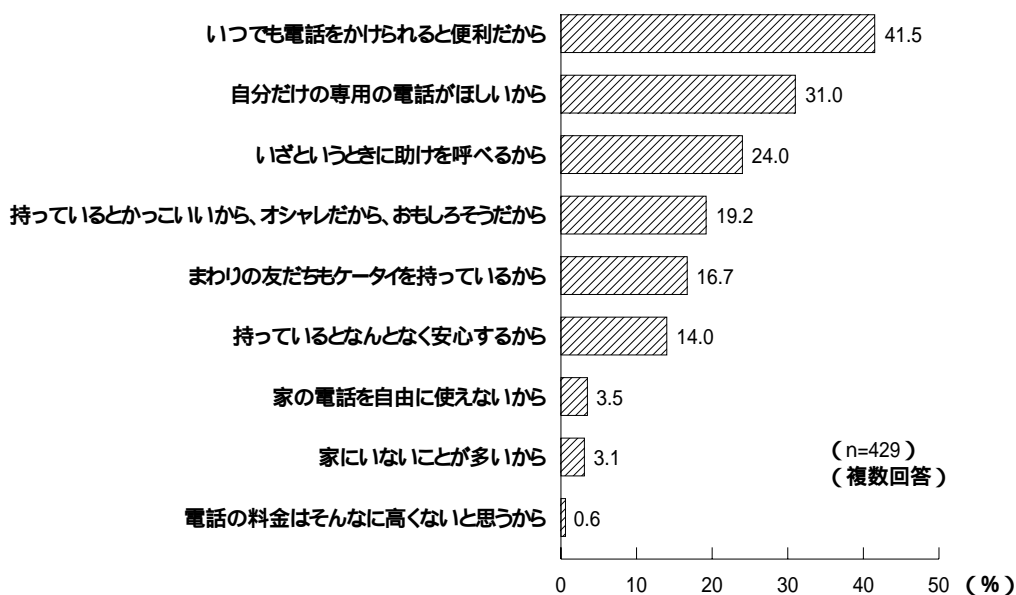
にとって、ケータイは外出先で使える電話というよりは、自分専用電話であるという要素が強いものと推察される。また「持っている」と安心する(14.0%)という「安心ニーズ」が意外に低く、「かっこいい・おもしろい」(19.2%)ほうが評価が高いことも興味深い。**(8)子どもは携帯電話をどのように使いたいか**

子どもたちは実際に携帯電話をどのようなことに使いたいと考えているかについて尋ねたところ、全体の1位は「いそぎのときのれんらくに使う」となったが、男女別で非常に差がみられた(図表9)。女子では、携帯電話は「家に電話をする」という目的を挙げた人が、全体で1位を占めた「いそぎのときのれんらくに使う」を上回って74.7%を占めている。また、女子は文字メールと着メロ(着信メロディ)に対する欲求が強い。文字メッセージ交換については、女子の57.7%が「使いたい」としているのに対して、男子では36.7%となっている。その他、友

だちのおしゃべり、ケータイの装飾など、多岐にわたって男子よりも強い関心を示していた。

一般に、男子に比べて女子の方がコミュニケーションに対する欲望が強く、特に文字によるコミュニケーションについては積極的である。ライフデザイン研究所が小学4年生から6年生に対して行った過去の調査でも(1996)*⁸、「友だちづきあいがうまくいくように心がけていること」として、「手紙や交換日記を書く」をあげた割合は、男子で1.7%、女子で64.6%との結果がでている。女子は毎日会ってしゃべっている友だちと、あえて文字でもコミュニケーションするなど、多様なコミュニケーション手段で接触する傾向がある。数年前、ポケットベルが女子高生らに絶大な支持を受けたことを受け、今日の携帯電話では文字メッセージの交換ができるようになった。こうした携帯電話の機能の多様化により、通話機能のみでなく、文字メッセージの交換も重要な携帯電話の

図表8 子どもが携帯電話を欲しい理由(子の回答)



機能となったが、その機能は小学生のうちから既に女子において強い関心をひいていることがわかった。

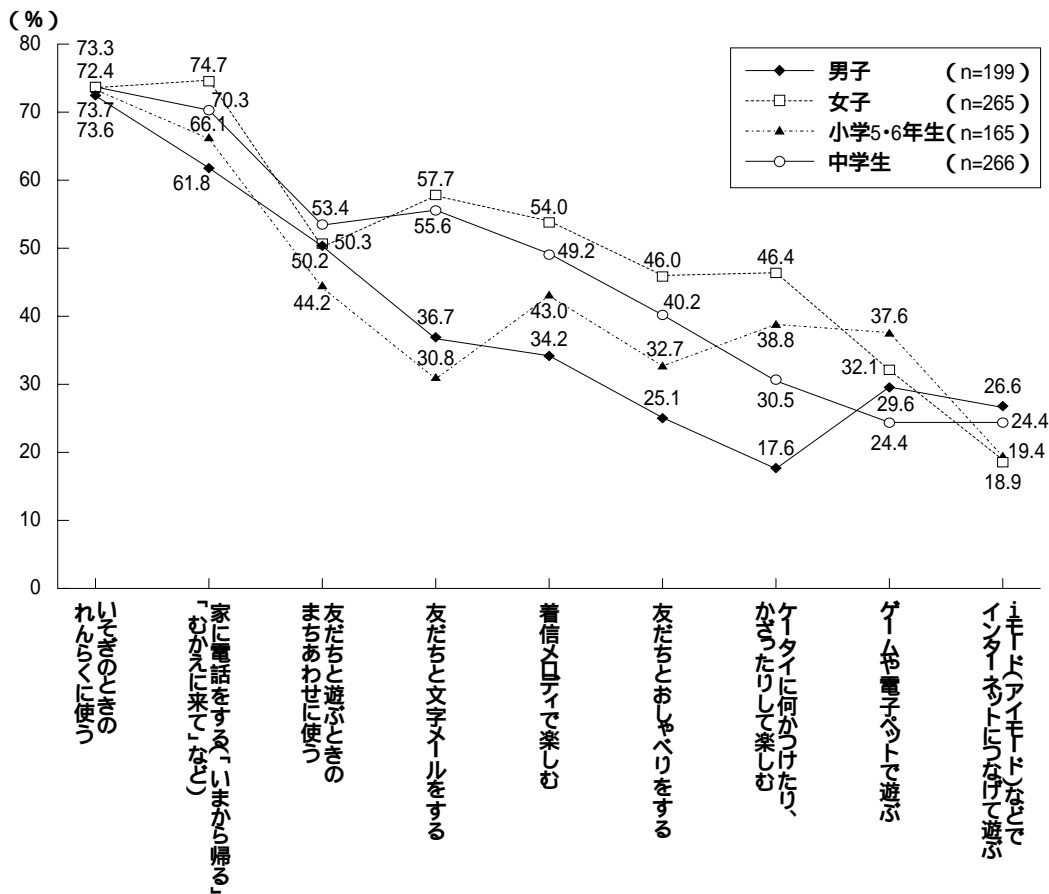
(9) 子どもの携帯電話利用に対する子どもの意識

それでは、子どもは「携帯電話」のイメージやあり方等についてどのような意識を持っているのだろうか(図表10)。全体的にみて、携帯電話の利用に関するルールやモラルについては、一般的にいわれるような非常識な感覚はそれほどなく、現実的なイメージでとらえていることがわかる。

性別にみると、男子では「ケータイは、お金がかかるので料金が心配だ」「ケータイがあると、悪いことをする人が多くなると思う」

「ケータイがあると、悪いことや怖いことにまきこまれそうな気がする」などのネガティブかつ現実的なイメージが女子より強い。のに対して、女子では「ケータイがあれば、いつもだれかに電話できるので安心すると思う」「夜などに一人で歩くとき、ケータイを持っていればこわくないと思う」「ケータイがあると、いつでもだれかとつながっている感じがすると思う」などのポジティブかつ感覚的なイメージが強い。これらの傾向は、宮木がこれまで行ってきた調査研究(1996 -)において、10代後半や20代でも同様に見られる男女差である。携帯電話に対して、女性が感覚的・イメージ的にポジティブで、精神面での依存傾向が強いのは、

図表9 子どもが考えている携帯の使い道(子の回答)



小中学生のころから既にみられる傾向であるというのは興味深い結果である。

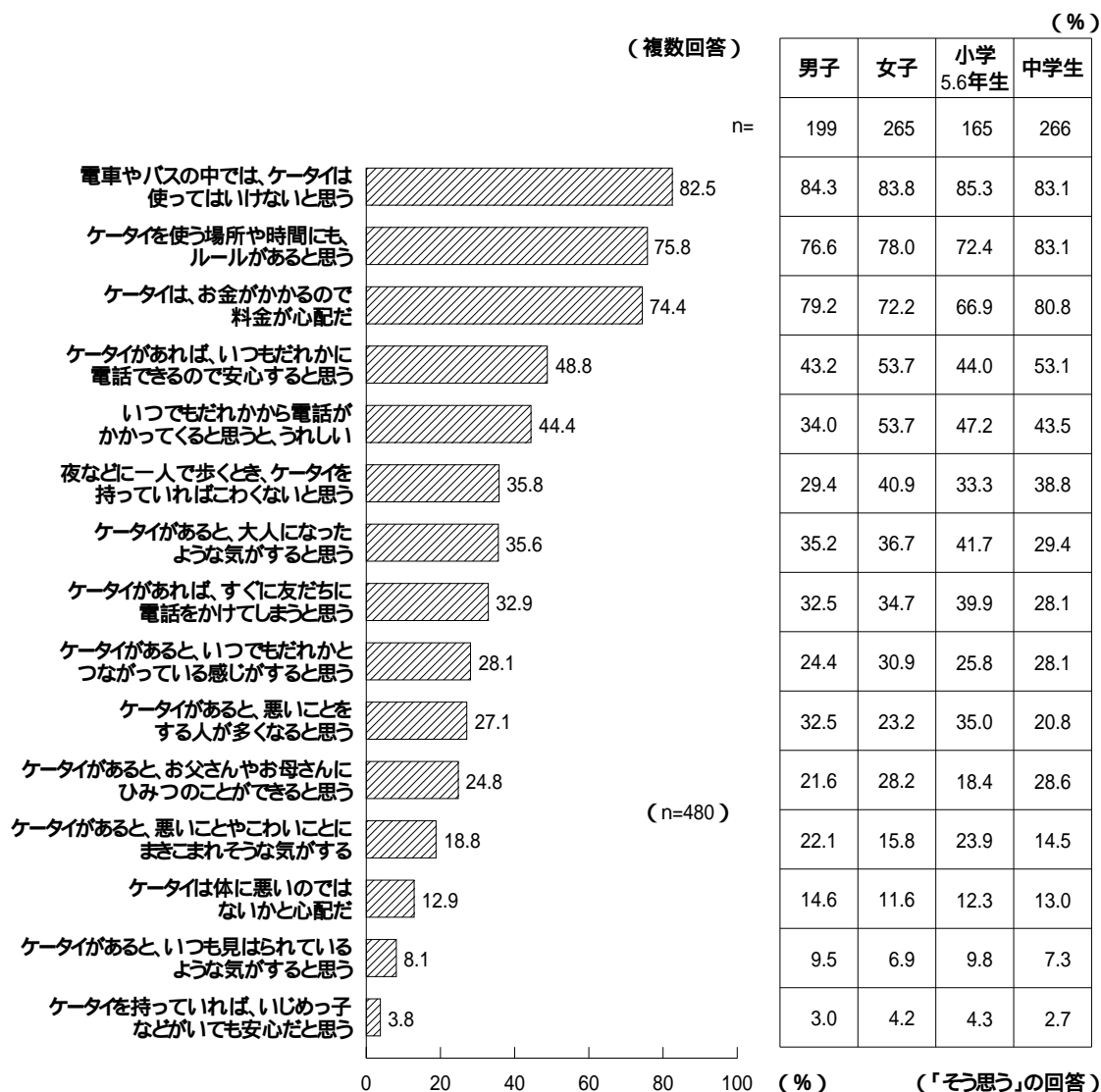
(10)母親の携帯電話利用

一方、親に対する調査では、親自身がどの程度携帯電話を使っているのかについても尋ねている(図表11)。親のうち「自分専用の携帯電話を持っている」とした母親は、40.7%だった。また、母親においても家族と共用というケースがあるが、「家族の携帯電話を使っている」とした割合は18.3%だった。これらを合わせると、59%

の母親が何らかの形で携帯電話を利用している。子どもの携帯電話利用と母親の携帯電話利用の関連をみると、母親の利用があると子どもの利用も多いという結果になっていた(図表12)。

親が子どもについて「危ないと思う時」と子どもの携帯電話利用の関係についてみると、「学校の登下校時」について、子どもの携帯電話「利用なし層」では35.6%であるのに対して、「利用あり層」では52.2%が登下校時を心配だとしていた。また、危な

図表10 子どもの携帯電話利用に対する子どもの意識(子の回答)



いと思う場所と子どもの携帯電話利用の関係についても、ほとんどの項目で「利用なし層」より「利用あり層」で、回答が多かった(図表13)。

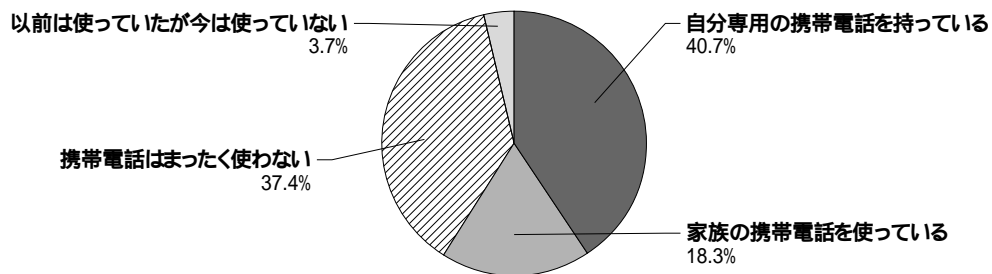
(11)子どもの通信利用とコミュニケーションに対する親の見解

それでは、親は子どもの通信利用とコミュニケーションについてどのように考えているのだろうか。これについて尋ねたところ、「親として、子どもに通信メディアの利用に関するモラルやルールについて、責任をもって教える義務があると感じている」親は95.3%だった(図表14)。また、「子どもが友だちと電話で話した内容や電話の相手のことは、親としてなるべく知りたいと思う」についても、高い割合を示した。

一方で、「昼間会った友だちと、夜に長電

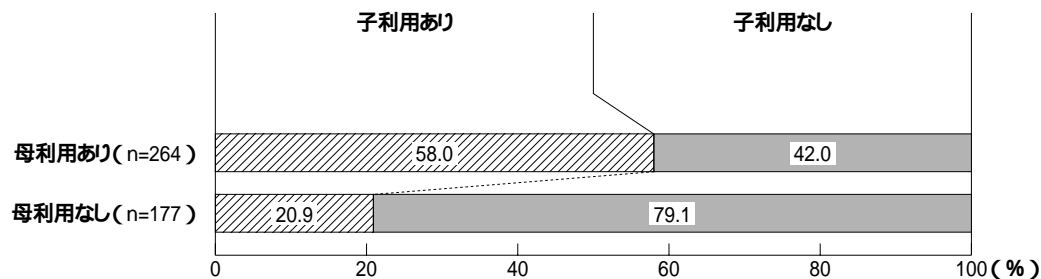
話をしている子どもは理解しがたい」については55.5%となっている。これを親(16~24歳の親の年代別に比較すると宮木1998)、50歳以上の親で70.3%が、50歳未満の親でも60.8%が「理解しがたい」としていた。このことから、本調査における小中学生の親では、年齢が若いほうが、電話に対する意識が若い世代寄りであると推察される。ただし、子に対する通信メディア利用の教育に関する義務感や、子どもの通話相手の把握などについては、年代が高い親より関心が高く、成長過程にある子どもの通信利用についての意識が高いことがわかる。現代の小中学生の親は、電話の利用感覚において若い世代に近いものを持ちつつ、子どもの電話利用については親の管轄下にあるべきとの考え方を持っているようだ。

図表11 母親の携帯電話の利用状況(母親のみのデータ)



注:n=575(小学3・4年生の母親、5・6年生の母親、中学生の母親の合計)

図表12 母親の携帯電話利用と子どもの携帯電話利用



親世代の電話に対する意識をさらに細かくみると、「現在長電話をすることがある、もしくは昔は長電話をしていた」については77.5%が、「自分は、『電話は用件のみで簡潔に済ませる』という価値観の中で育った」については58.8%が肯定するという結果になっていた。これを1998年のデータ(宮木)

と比べると、「自分も、若いころは長電話が好きだった、もしくは長電話をしたかった」という設問に対して、1998年のデータにおける16～24歳の子を持つ50歳未満の親では52.9%、50歳以上では32.3%が肯定した。同じく「自分は、『電話は用件のみで簡潔に済ませる』という価値観の中で育った」につ

図表13 親が子どもの安全について不安を感じる時間・場所(親の回答)

		(%)	
		利用あり	利用なし
		n=	205
			267
不安を感じる時間	天候の悪いとき(雨、雪、台風など)	59.5	53.2
	塾や習い事の行き帰り	53.7	55.4
	学校の登下校時	52.2	35.6
	夜間の外出時	32.2	35.6
	放課後の遊び時間	18.0	19.1
	休日	10.2	5.2
	学校にいる間	2.4	3.4
不安を感じる場所	道路、道ばた	70.7	65.9
	繁華街	55.1	45.7
	ゲームセンター、カラオケボックスなどの娯楽施設	52.2	50.9
	公園	32.7	26.6
	電車、バスなどの交通機関の中	30.7	15.0
	集合住宅のエレベーター・階段などの共用スペース	26.3	23.6
	商店街	21.0	15.7
	駅	20.5	12.4
	遊園地や動物園などの大型レジャー施設	10.2	6.4
	友人や知人の家(遊びに行っているとき)	4.4	6.4
	学校の校庭	3.9	1.1
	学校の教室	3.4	1.9
	塾、習い事教室	1.5	0.4

注:子どもの携帯電話利用の有無別、複数回答

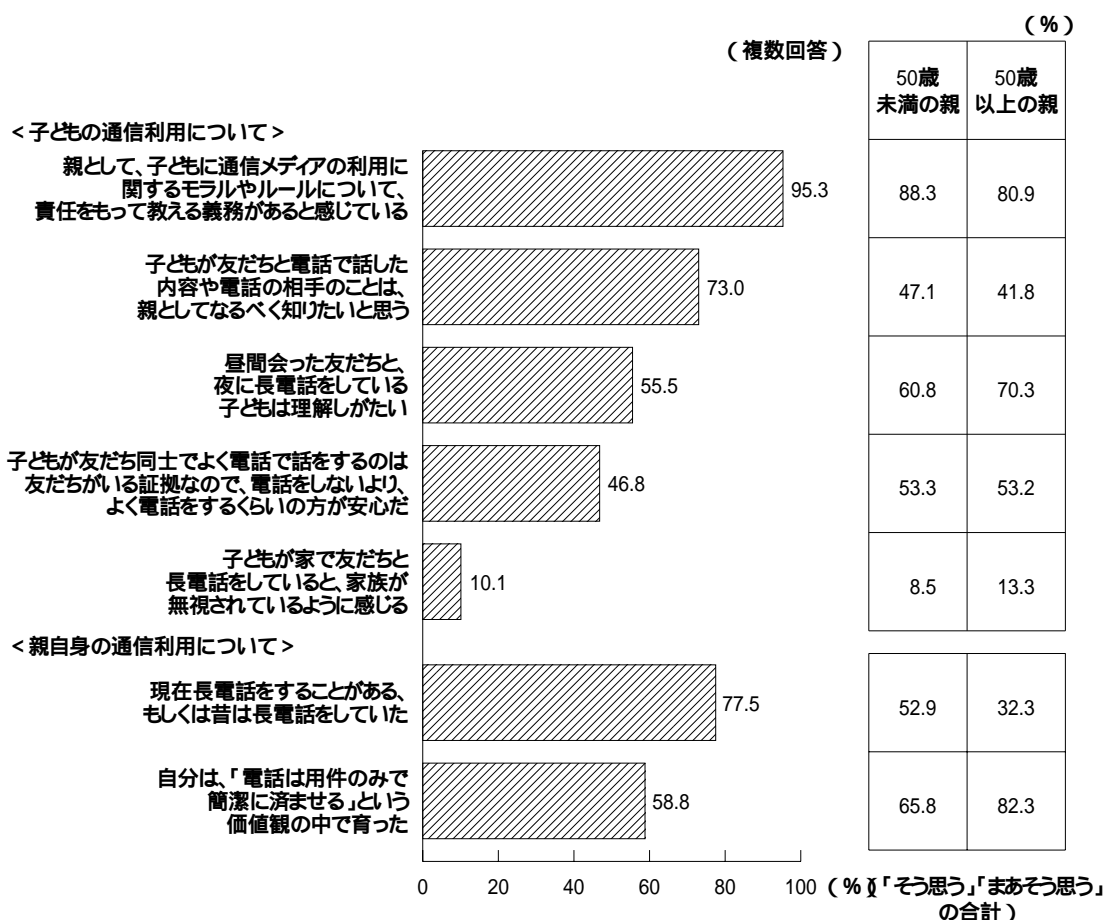
いては50歳未満で65.8%、50歳以上で82.3%となっていることから、世代ごとに電話に対する感覚や価値観が大きく異なっていることがわかる。

(12)子どもの携帯電話利用に対する親の意識

それでは、親は子どもの携帯電話利用についてはどのような意識を持っているのだろうか(図表15)。子どもの携帯電話の利用のあり層・なし層の合計でみると、上位3位が、利用に対するルールや責任、料金に関するもので、4位に携帯電話を持たせること

による「安心感」の評価が入っていた。また、「親に隠れてすることが増える」について、「電磁波への懸念」も過半数があげた。携帯電話の発する電磁波の影響については現在研究が進められているが、成長期の子どもにおいて普及が進む中で、特にその安全性の早急な立証が求められる。一方、「家の電話のルールの崩れ」や「子どもの管理がしやすくなる」については、4割を割っており、子が携帯電話を持つことで生じるとされている一般的な影響については、それほど高い割合を示さなかった。

図表14 子どもの通信利用とコミュニケーションに対する見解(親の回答)



注:16~24歳の子を持つ親の回答(1997年調査) n=617
 基本的に今回の調査と1997年調査の設問文は同じものを使用した
 が、「現在長電話をすることがある、もしくは昔は長電話をしていた」についてのみ、
 1997年調査においては「自分も、若いころは長電話が好きだった、
 もしくは長電話をしたかった」という設問文で尋ねている

子どもの携帯電話利用の有無別に親の意識をみると、「利用あり層」と「利用なし層」で差が大きかったものは、「子どもが携帯電話を持てば、いつでも連絡がとれるので、外出時や夜道の帰宅時でも安心できる」で、「利用あり層」が87.7%だったのに対して、「利用なし層」では69.8%だった。また、「子どもが携帯電話を持つと、親に隠れてすることが増えるような気がする」については、「利用あり層」が45.3%であるのに対して、「利用なし層」では63.1%となっていた。さらに、「子どもが携帯電話を持っていると、親が子どもの管理をしやすい」については、「利用あり層」44.3% / 「利用なし層」30.4%、「子どもが携帯電話を持っていれば、母親も外出しやすと思う」では、「利用あり層」37.6% / 「利用なし層」29.4%、「子どもが携帯電話を持つようになると、家の電話利用のルールが崩れるような気がする」については、「利用あり層」で28.0% / 「利用なし層」で45.0%となっていた。総体的には、子どもが携帯電話を利用している親では、携帯電話の利便性の評価が高く、一般にいわれている弊害も感じていない様子がうかがえる。一方で、子どもが携帯電話を利用していない親では、携帯電話のイメージが悪く、親子関係の悪化やルールの崩壊等、ネガティブな面を懸念する傾向が強い。

(13) 家庭における電話利用のルール

それでは、今日、家庭における加入電話利用のルールは存在しているのだろうか。キャッチホンがあるのになぜ長電話がいけないのか、相手が一人暮らしだったり携帯電話だったりする場合にも夜の電話がいけないとされるのはなぜかなど、今日の通信環境の多様化は、従来型のルールが構築

されるにいたった制約をなくしつつある。しかし、親の世代では電話の利用に対して従来型の電話モラルやルールに基づいた価値観を持っている人も多く、子世代との意識の乖離がある。こうしたことについて、小中学生の子どもがいる家庭ではどのような現状なのかを調べた(図表16)。「緊急の時を除いて、夜遅くや相手の迷惑になる時間に電話をかけるべきではない」については、96.8%が肯定した。また、「用事もないのにむやみに電話をするべきではない」についても肯定する割合が高く、77.5%となった。8割近くが「長電話をする」と答えた現代の小中学生の親でも6割が「長電話はするべきではない」とするなど、全般的に加入電話利用の「ルール」としての従来型の感覚は若い親世代でも継続されており、1997年調査(宮木)における16歳から24歳の子を持つ親と同程度、もしくはより厳しいルールを持っている(図表14参照)。特に、「自分にかかってきた電話の家族への報告」など、子どもの対人関係について積極的に介入しようとする親が少なくない様子がうかがえる。

(14) 子どもの携帯電話利用に対する親の懸念～フリーアンサーから～

今回の調査においては、フリーアンサーからも重要な情報が得られた。その中から、目立った指摘についてまとめる。

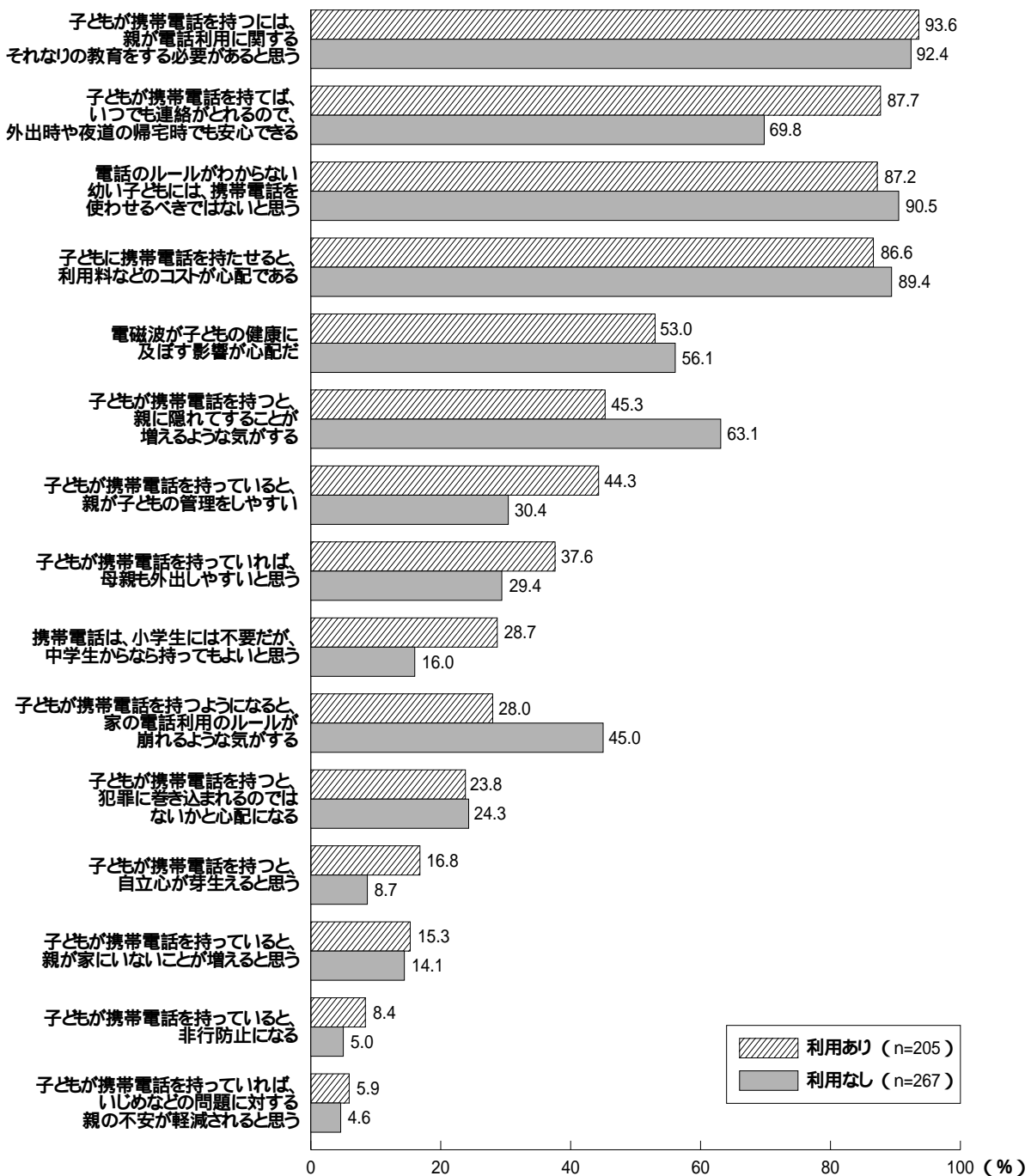
子どもが携帯電話を持つことで、確かに親は子どもの居場所確認や安否確認ができるようになり、安心感をもたらす。その一方で、携帯電話は新たな不安ももたらしている。例えば、「今どこ」の問いに「塾」と返答されても、確認しようがない。子どもの虚言について、親が疑心暗鬼に陥るケースもあ

る。位置情報サービスのあるPHSを持たせて、子どもの所在地を確認する親もいる。

さらに、これまでは加入電話の仲介や干渉によって、親が把握できた子どもの友人関係が、携帯電話で直接やりとりをするよう

になるとわからなくなるとの声も多い。加えて、子どもが携帯電話を持っていると、子どもが自ら考えることなく、安易に親に指示を求めてしまい、自分で対処する能力が培われないといった懸念もなされている。ま

図表15 子どもの携帯電話利用に対する親の意識(子どもの携帯電話利用有無別)



た、子ども同士が直接電話でやりとりをするようになると、友人の親などの親以外の大人と話す機会がなくなるといったこともいわれている。携帯電話を保有する子どもを、他の子どもたちが当てにして公衆電話代わりに借りてしまい、料金が膨大になったというケースもあった。このように、子どもが携帯電話を持つことで、親にもたらされる安心もあれば、もたらされる新たな不安もあるのが実態だ。

フリーアンサーから、費用がかかるなどの経済的側面を除いて、親が子に携帯電話を持たせるかどうかを検討するとき、親の

子に対する信頼の状況に応じて、次のような相反する対応があることが確認された。

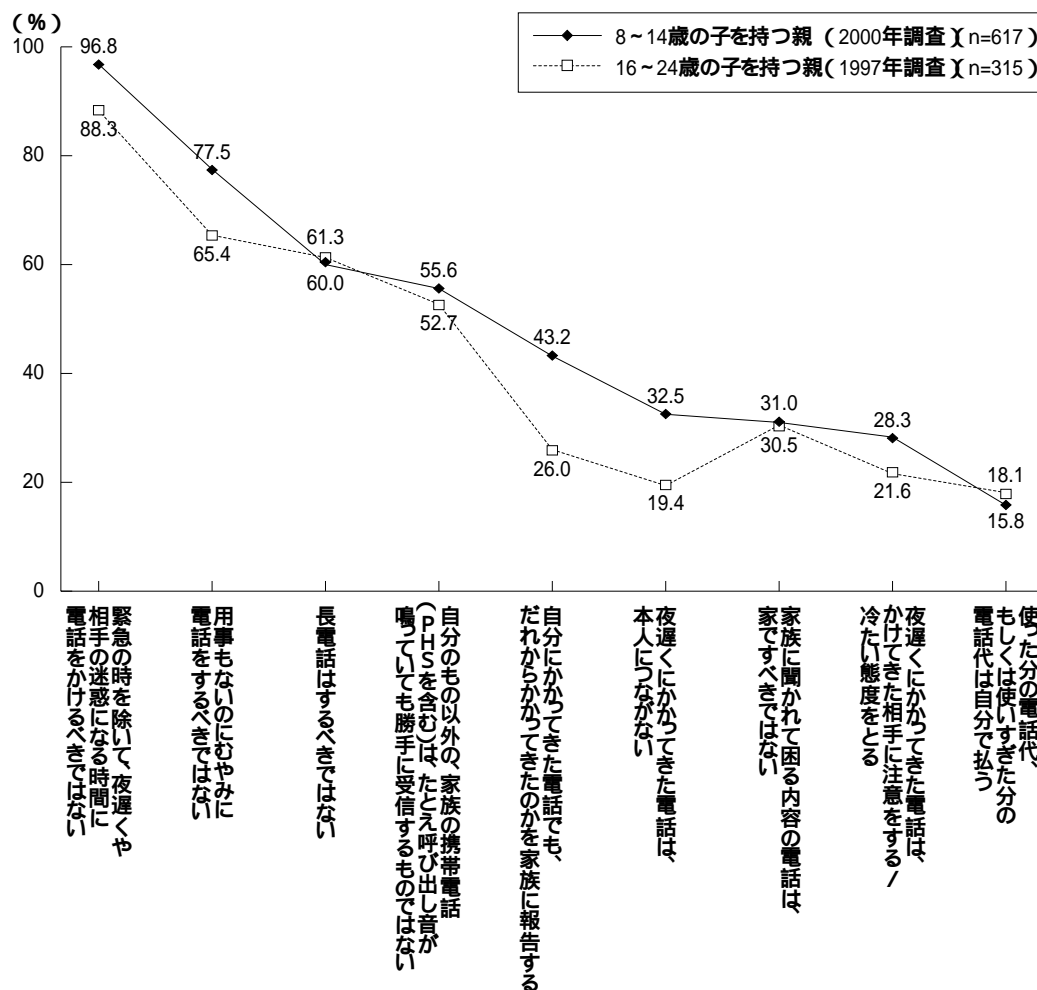
信頼しているから持たせる：子どもはルールを守って常識的に携帯電話を使えるので持たせてもよい

信頼しているから持たせない：携帯電話などなくても子どもは行き先を告げて外出し、外出先からもこまめに連絡してくるので不必要

信頼していないから持たせる：どこで何をしているかわからないので確認用に必要

信頼していないから持たせない：ルールが守れない子どもなので、何に使うかわ

図表16 家庭における電話利用のルール(親の回答)



からず持たせられない

携帯電話に対する思惑は親子それぞれだが、携帯電話を持たせるか否かによって生じる、プラス・マイナスの影響は、親子間の信頼関係やコミュニケーションの状況、ルールやしつけといったことの反映ともいえるようだ。

5. 小中学校の現状と課題

ここまで携帯電話と親子の関係についてみてきたが、今日の子どもにおける携帯電話の浸透には、学校での保有と管理といった問題もある。既述したように、通学時の安全確保や緊急連絡用として子どもが携帯電話を持つケースが多いが、小学生や中学生が、安全確保のためとはいえ学校に携帯電話を持ってくるとは、各学校で既に様々な問題を引き起こしており、学校側の悩みの種となっている。これについて、学校に対して行ったアンケート調査を元に、学校での現状と問題点・対策についてその実態を紹介する。

調査は、2001年1月に東京都の世田谷区^{*9}の公立小・中学校^{*10}に対して、質問紙郵送調査法(一部電話にてデータ収集)で行った。主な回答者は学校教頭もしくは生活指導担当となっている。

(1) 普及の状況について

回答のあった学校の状況をみると、まず普及状況については半分以上の学校が、「かなり進んでいる(クラスの半分以上が持っている)」「ある程度進んでいる(クラスの4分の1程度は持っている)」と答えた。小学校では「ある程度進んでいる」どまりだが、

中学校では「かなり進んでいる」とした割合も多かった。小中学校においても、携帯電話の普及は着実に目立ってきている。

(2) ルールの有無と罰則について

こうした中、携帯電話の所持や利用に関するルールについては、学校によって様々であるが、多くは「所持禁止」で、見つかった場合の罰則は没収し、親へ通知をする、下校時に返却するなどの対応をとっているとする学校が多かった。一方で、基本的には黙認、もしくは所持の申請制という形で認めているという学校もある。学校調査の結果からは、公立と私立の差を確認するほどのサンプルが確保できなかったが、親子調査では私立に通う子どもには電車のトラブル等に備えて持たせたいとの意見も多かったことを受け、携帯電話の扱いは、学校によって様々なものとなっているようだ。

(3) 子どもの携帯電話利用に対する学校としての見解

学校における、子どもの携帯電話の所持についての考え方としては、「あまり望ましくないが、仕方がないことだと考えている」が最も多く、「非常に望ましくないことだと考えている」が続いている。「望ましい」とした意見はまったくなかった。何らかの形で携帯電話の所持を認めている学校においても、子どもが携帯電話を利用することについては懸念を抱いている様子が見えがえる。

(4) PTAなどでの反応について

さらに、PTAで子どもの携帯電話所持が問題になることがあるかについて尋ねたところ、6割が「ある」と答えた。親の意見としては、「どちらかといえば子どもが携帯電話を持つことに否定的な親が多い」か「肯

定的な親と否定的な親の両者がいる」のどちらかとなっており、肯定的な親は多数派にはなっていない。

(5) 小中学校における問題点と課題

児童・生徒の携帯電話利用による問題やトラブルについては、4割程度が「ある」とした。具体的なトラブルは、授業中の呼び出し音や通話、文字メッセージの交換、紛失や盗難といったものである。また、記述回答から、携帯電話を使った嫌がらせやイジメが起きているという点、さらに携帯電話を使うことで人を集めやすくなったことから、近隣の他校とのトラブルもこれまでに比べて規模が大きくなりがちだという点が指摘された。PTAでも「必要」「不必要」で意見が分かれていることから、学校も対処や方針に困っているのが実情のようだ。親子調査では「学校では禁止されているが子どもが心配なので持たせている」と公言する親もいた。また、子どもの携帯電話を

学校で没収したことに対して、保護者から苦情が来たケースもあるという。卒業式の最中に、保護者の携帯が鳴ったとの学校もあった。学校側では、子どもの携帯電話利用については親が教育すべきとの見解を持つ一方で、親の携帯電話の利用マナーがなっていないとの意見も多かった。

6. まとめ

これまでみてきた実態を、「子ども」「親」「学校」ごとにまとめる(図表17)。子どもにおける利用の動機は、携帯電話の利便性、緊急性、安全性、専用性、ファッション性を評価して積極的に持ちたがる「能動的動機」と、親の能動的動機によるもの、すなわち「親に持たされる」という「受動的動機」がある。現代の子どもでは全般的に「遊び」の要素を中心に積極的に欲しがる傾向が

図表17 子どもの携帯電話利用の決定と問題点

子ども	動機	能動的動機:利便性、緊急性、安全性、専用性、ファッション性=「持ちたがる」	
		受動的動機:親の能動的動機=「持たされる」	
親	動機	子どもの安全確保	子どもがトラブルに巻き込まれるリスク(事件、事故) 子どもがトラブルに積極的に関与するリスク(非行)
	決定要因	ライフスタイル、ニーズ、経済的負担、悪影響、子との信頼関係等	
	決定	持たせたい・持たせる	能動的動機:子の安全確保(緊急性、安全性、管理性)
			受動的動機:子の能動的動機のみによるもの
持たせたくない・持たせない			
学校	子における問題	授業中の使用、盗難やイジメなどの問題発生	
	親における問題	親の見解の相違、携帯電話利用マナー・ルールの不在	
	校則上の問題	不要物は持参しないというスタンスとの兼ね合い	

強く、特にその牽引役は女子である。子どもが携帯電話を積極的に欲しがる場合、それは移動中の電話、いわゆる「モバイル」としてというよりは、「自分専用電話」としての「セルラー(個別空間)」的利用ニーズが高いのも特徴だ。

一方、親が子どもの携帯電話利用を許可する際の主な動機は子の安全確保である。親による子どもの携帯電話利用の決定は、安心面を中心としたニーズ、経済的負担、悪影響、子との信頼関係等となっているが、親が自発的に持たせたいと思うか、子どもの「持ちたがり」、すなわち能動的動機に対する親の許可という形で持たせるかという違いがある。子どもが携帯電話を所持することで親に安心感がもたらされるが、一方で新たな不安が生じるというジレンマがある。そうした中、自分自身も利用する親では子の利用も多く、また子の利用の効果に対する評価も高いという結果がでた。携帯電話に対する親の積極性も、子どもの利用を左右することがわかっている。

さらに学校についてみると、全般的に子どもに携帯電話は不要と考える傾向は強いが、ルール化は難航しているのが現状だ。子どもの携帯電話利用による学校での問題は、授業中の使用、盗難やイジメなどである。また、子どもの携帯電話利用に対する親の見解に相違が見られ、社会的な携帯電話利用のルールやマナーが確立していないことも、学校側としての対応を難しくしている。また、校則では「不要物は持参しない」というスタンスをとっているが、「携帯電話は不要物か」という判断も難しい。

総合的にみて、子ども、親、学校の三者でうまくバランスをとるのは困難だ。親の見

解と学校の見解が異なる複雑な状況に身を置いている子どもも少なくないだろう。親も学校も、何らかのルールや統制の必要性を感じてはいるものの、そのよりどころがないのが実態だ。社会的な「携帯電話の利用ルール」が確立していない今、子どもへの携帯電話の普及に対してモラルや使い方の教育をできる組織も人間も不在なのが現状なのである。

7. おわりに

携帯電話の子どもへの普及はまだ発展段階にある。しかし、子どもにおける携帯電話の便益やニーズは大きく、今後その普及は進んでいこう。しかし今日、携帯電話の利用について、家庭や社会で何を基準にルールを構築するかといった点が不明確だ。携帯電話が「通信」という、コミュニケーションを目的としたものである以上、子どもの友人関係の維持・構築等に大きくかかわってくることは必至である。家庭で携帯電話を禁じても、子どもは友人を通じて携帯電話にかかわる機会を持つ。「友だちはみんな持っている」という言葉に、携帯電話の所持を許す親も少なくない。

携帯電話を通して、家庭ないし親と、子ども、子どもの友人関係といった三者間でどのような関係を構築するのは非常に難しい問題である。さらに、「学校」というフィールドでのルールとの兼ね合いも必要となる。今後、「子どもに携帯電話を持たせれば安心」「子どもに携帯電話を持たせると危ない」といった短絡的な議論ではなく、子どもの携帯電話利用のベースとして、携帯

電話を持たせるに堪える関係構築や教育、
ルールづくりが親子間でなされているか、
またそれを学校という家庭とは別の組織
の中でどのように存在させるかということ

改めて検討していく必要がある。こうしたこ
とが、子の携帯電話の所持を「プラスに作
用させる」ためのキーとなるだろう。

(研究開発部 研究員)

【注釈】

- *1 総務庁 青少年対策本部『低年齢少年の価値観等に関する調査』2000
- *2 中村功『子どもはどこで犯罪にあっているか』晶文社、2000
- *3 4-(11)においても詳述
- *4 本論で扱う調査対象としての「小中学生」は、質問紙調査の都合と普及の進んでいる年代等を鑑みた上で、小学校高学年(5・6年生)と中学生に限定して扱っている。ただし、親調査については、小学校3・4年生の親も対象にしている。
- *5 一般に「ブラウザフォン」とされる。
- *6 最近の携帯電話では、本体だけではなく、インターネット等を利用して、着信メロディを自分で選曲・設定、もしくは作曲などをして楽しむことができ、人気が高い。
- *7 親の回答は、特段の理由がない限り母親に依頼しているため、親全体の92.4%が母親となっている。
- *8 ライフデザイン研究所『子どもの友だちづきあいに関する調査研究』1996
- *9 都内の市区町村で最も人口が多く、学校数も多いことから選択。
- *10 平成12年度版「東京都学校名簿」を参考に送付

【参考文献・資料】

- ・阿部由貴子『現代青年層の移動体通信ライフ』ライフデザイン研究所、1997
- ・小此木啓吾『ケータイ・ネット人間の精神分析』飛鳥新社、2000
- ・警察庁編『平成12年版警察白書』2000
- ・情報通信総合研究所編『情報通信ハンドブック2001年版』2000
- ・総務庁 青少年対策本部『低年齢少年の価値観等に関する調査』2000
- ・総務庁 青少年対策本部『青少年と携帯電話等に関する調査研究報告書』2000
- ・東京都教育委員会『平成12年度版東京都学校名簿』原書房、2000
- ・中村功『子どもはどこで犯罪にあっているか』晶文社、2000
- ・宮木由貴子『青年層の通信メディア利用と友人関係』(LDI REPORT 1999.7)ライフデザイン研究所、1999
- ・宮木由貴子『パーソナル通信メディアの普及と親子の通信価値観』(LDI REPORT 1998.6)ライフデザイン研究所、1998
- ・ライフデザイン研究所『子どもの友だちづきあいに関する調査研究』1996

